20201101レムナント教会1部

**アブシャロムの反逆(Ⅱサムエル記15:13-18)**

　イエス様を信じている信者は、実はすでに祝福を受けている存在です。けれども、この祝福が実際に祝福として現れないでいるということが残念なことでもあります。なぜ祝福されたのにもかかわらず、実際、現実にはその祝福が人が見て分かるように現れることがないのでしょうか。いろいろな理由の中の一つが、肉の欲というもののためです。それによって祝福が表に現れることを邪魔されるということを今日覚えていただきましょう。

　今日の聖書の箇所は、アブシャロムが父親のダビデの王座を欲しいがゆえに反逆を起こして、ダビデが宮殿から逃げていく場面です。もちろんダビデがこのアブシャロムと戦って負けるわけではないと思います。しかし、殺しあう悲惨なことは避けようと、たぶんそういうことだったと思います。アブシャロムは大変な過ちを犯してダビデに赦され、和解もいただいて、子どもとして、王子としての身分を回復してもらった者です。それにもかかわらず全く感謝することもなく、心には不満が消えないままの状態でした。やがてその不満は肉の欲望に発展して、それが野望に走ることになったということです。もちろんこの野望が一時的に思い通りに行くかのように見えます。しかし、最終的には悲惨な終わり方をしてしまうということが聖書の証言です。これを通して今を生きる信者の私たちは、明確にメッセージを握らないといけないと思います。

　それは何かと言いますと、人間の肉の欲望というものは、人生を無駄に費やすようにしてしまい、最終的には失敗に終わらせるものなのだということです。ダビデは悔い改めました。しかし、その息子たちによってそれがあからさまに見えるようになります。ダビデの息子の一人、アムノンは、自分の本能に従って、その本能の欲を満たすために大変な罪を犯すようになります。そして、それが満たされた途端に、人ががらりと変わったということを私たちは見ました。これが肉の欲望というものなのです。それから、アブシャロムは、それに対する憎しみの感情に従って動くようになります。その憎しみの感情を満たすために行動に移した結果、復讐を働くようになりました。これが肉の情欲、欲と言うものです。そして、アブシャロムはそこに留まらず、父親の王座、権力を欲しいという野望があったので、その野望に従って結局は反乱を起こして反逆の道を走ることになりました。これが肉の欲望に従って動く人間の姿というものです。もちろんここで肉と言われたときに、肉的な部分を最初から無視して軽んじるという意味ではありません。また、肉的なものを制御するために禁欲主義に走ったり、断食をしたりということが肉に勝つものではありません。私たちは肉を持っているから、お腹がすけば食事をしないといけません。また、性欲もそれ自体が悪いものではありません。それがないと家庭が成り立たないし、子孫を増やすこともできません。その肉そのものを無視するわけではありませんが、肉の欲に走るというのは、その肉の条件がすべてなのです。肉が中心であり、肉のことが目標になってしまうことを肉の欲と言います。そうなると、必ずそこには欲が生まれるようになるし、その欲は野望は作り出すようになり、その野望を達成するために、ある人は必死になって頑張るでしょう。ある人は卑劣な方法を使う場合もあるでしょう。どっちにしてもむなしいことであり、そして、人生を結局は無駄に費やしてしまうことになってしまいます。肉を目標にして、肉がすべての価値基準になり、その肉が中心になってしまうと、そこを満たさないといけないので欲に走るしかありません。このような肉の欲というものがいつから始まったのかということを確認しないといけません。

　それは人が罪を犯して神様を離れたそのときから見られるものです。最初から人間が肉的な欲求に走っていたわけではありません。なぜなのでしょうか。神のかたちに造られて、神からすべての祝福をいただいて、豊かであり満足していた者なのです。しかし、罪を犯した結果、神様を離れることになり、そのときから肉になってしまいました。創世記3：7を見ますと、こう書かれています。「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」。裸であることを恥ずかしく思うようになり、このときから霊の目が閉じられて、霊のことが麻痺されて、肉の目が開かれて、肉しかない存在になってしまいました。私たちは生まれながらこのような状態で生まれるので、これが当たり前だと思うでしょうけれども、信者の私たちは聖書を通して、肉の欲に走るということがどういうことなのかを正しく理解しないといけません。このときからみな肉を中心にして人生は流れ、歴史は流れることになりました。ですから、創世記6：3を見ますと、ノアの時代にこのように神様がおっしゃいます。「そこで、主は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。」と仰せら れた」とあります。神様がおっしゃいました。神のかたちに造られている人間のたましいが神様と交わり、霊的な世界が中心なのに罪によってたましい死んでしまい、霊的なことが麻痺してしまったので、その結果、肉が中心で肉がすべてであり、肉によって動かされるようになってしまいました。それが創世記11：4にはバベル塔の事件を通してこのように表されます。「そのうちに彼らは言うようになった。『さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。』」。頂が天に届くというのは、神様のことを無視するということなのです。霊的なことは全く無知なので、肉を中心にして、肉を極めることによって人間の名を知らしめようではないかという願望なのです。これが肉によって流され動かされることです。それ以来ずっと地球の歴史は、そのような道を辿ることになりました。肉の欲に従う、それを満たすために頑張るということは、最終的には肉の奴隷になるしかありません。そして、肉の奴隷になるということは、目に見えないサタンの奴隷として生きるということを意味するわけです。ですから、それが自分の思い通りに達成できたとしても、その人生はむなしいものであり失敗に終わってしまいます。それから、大体の場合は、その肉の欲を満たすために手段を選ばず、結局それによってさまよう人生になってしまいます。答えのない希望のない実りのない人生を生きるようになります。いのちとは全く関係ありません。それを達成すると、そこで自分なりに満足感を味わい、あるいはそれを誇りに思い、そうでない者を無視したりする、それがこの世界ではないでしょうか。問題は「イエス様を信じます」と告白している信者でさえ、この肉のことに執着して、それに未練を持っていたり、あるいは魅了されるようになるということなのです。つまり、信者なのに肉に振り回される人生が終わらないでずっと続くということ、これが私たちが見つめないといけないことです。しっかりとその部分を見つめて、そこから自由になりクリスチャンとして、天からの祝福をいただいていた者としての人生の生き方を取り戻すようにしなければなりません。世の中ではこの肉の欲というものがあまり良くないと思った人が、それを制御するためにいろいろな方法に走ります。

　今回も高知のキャンプに行ってきましたが、四国八十八か所のお遍路の場所の中で31番目に当たるところに行きました。ものすごいところで、そこに行くまでに階段もいっぱいあって、みな行く途中からいろいろな効果を感じるようになるのではないかなと思うようなシステムでした。そこにはもちろん自分の欲、欲求を満たすために来る人が半分、あるいはその肉の欲を制御するために、それを抑えるために来る人も半分ぐらいいるような気がしました。そのように修行したり、滝行などをしたり、また禁欲に走ったり、断食をしたり、瞑想をしたり、様々な方法でします。しかし、それは正しい方法ではありません。聖書には7倍もひどくなると言われています。肉に走ることもサタンの奴隷であり、その肉から自由になるために瞑想に走ることはさらに7倍も強い悪霊にとりつかれる道なのだと聖書は明確に教えています。クリスチャンの私たちもそのようなことで振り回される場合がなんと多いのでしょうか。教会の歴史を見てもそうです。今の時代を生きる私たちは、幸いなことに神様から正しいいのちの福音を教えられました。ですから、私たちはこの肉の欲求に勝利するための答えを正しく理解しないといけません。あのように修行したり、何かをすることではありません。ヨガに走ったり、自分でわざわざ苦労することによって肉を抑えつけるような方法ではありません。

　信者は肉の欲に走る必要のない、もうすでに天からの祝福をいただいている者なのだということを忘れずにしっかりと信仰に立って、その祝福を味わうこと、それで豊かになることによって肉の欲求から自由になることができます。ぜひ覚えていてください。今私たちにもその肉の欲求に邪魔されることによって、信者としての光輝く姿がなかなか見られない場合もよくあるでしょう。それゆえ信者としてのいろいろな葛藤などもあるかもしれません。それで悩んでいる信者もいるかもしれません。それは悪いことではありません。そのような葛藤も悩みもないということが、逃げるということがより悪いことかもしれません。でもそういう方々が、別の方法に走ろうとせずに福音とキリストに戻って、「すでにその肉の欲求などは私にはもういらないのだ。それほど私は幸いな者で、私は天からの十分な祝福をすでにいただいている者なのだ」と、そこを日々、毎日確認していくこと以外には方法はありません。そうでないと和解の祝福をいただいて回復されたのにもかかわらず、アブシャロムのように悲しい人生を歩くしかありません。皆さん、私たちはどんな事情があろうが、どんな弱さを持っていようが、私たちは神様の一方的な恵みによってイエス・キリストを救い主として信じて受け入れた者です。ですから、皆さんのどうのこうのと一切関係なく、キリストのゆえに、キリストにあって、私はすでに幸せな者、すでに幸いな者なのです。エペソ1：3、天にある霊的すべての祝福を与えられたとあります。信じてください。これが刻印されていないので、昔の刻印が邪魔するわけです。だから、これが自分の刻印になるように日々向き合わないといけません。他の何かをやろうとせずに、私たちは自分のどうのこうのと関係なく、神様の恵みによって、キリストによって、キリストの中にあってすでに満足をいただいている者です。それほど裕福で豊かな存在なのです。ピリピ4：13には、私を強くしてくださる方にあって、できないことは何もないとあります。お腹がすいていても満腹でも刑務所の中でも刑務所の外でも、私はそのような環境、状況と関係なく、すべてのこと、すべての境遇において満足することができる者です。私たちの満足は状況や環境の改善ではありません。キリストこそが満足なのです。キリストこそが幸せなのです。この世の中を歩くときに、人生の歩みそのものは不安だらけです。しかし、私たち信者は自分のどうのこうのと関係なく、キリストによって、キリストの中にあって、すでにとっくに平安な者、安らぎをいただいている者なのです。ピリピ4：6-7、何も思い煩わないで、祈りをもって主にお願いしなさい。神のすべてにまさる知恵と平安が、あなたがたの心を守ってくださるだろうとあります。刑務所の中で今告白しているのです。刑務所の中でも奪われることのない平安を味わうことができる存在なのです。ですから、平安や幸せを求めて満足を求めて暴れる理由など一切ありません。何かが満たされることによって、何かが変わることによって、人間がこうなることによって、私は幸せになる、平安がそこにある、そうなれば不安がなくなるだろう、と思うことが未信者の考え方です。極端に申し上げると、「どうでもいいですよ」。キリストこそが幸せなのです。キリストこそがいのちです。キリストこそが満足であり、キリストこそが平安なので、イエス様ご自身がおっしゃいました。「わたしがあなたがたに平安を残します。この平安は世が与えるものとは違う」と。それを皆さんが気づいていないでしょうけれども、すでにとっくにいただいているし、奪われることがないのです。だから肉の欲求などに走る理由などはありません。極端に申し上げると、すべて奪われるなら、奪われて結構なのです。譲ればいいではないでしょうか。あくせく掴もうとして、自分のものにしようとする、そういう欲などは私たちには要らないものなのです。キリストで十分です。刑務所の中でもたとえ死ぬことがあっても、キリストで十分なのです。それがないと世にいる間に仕方がなく肉の欲求に振り回されて、一回しかない人生を無駄に費やしてしまう結果になります。時間は私たちのために、私たちが正常に戻るために止まって待ってくれるようなものではありません。ずっと流れます。5年ぐらい待ってくれて、それからしわが始まるとなれば幸いでしょうけれども、しわもずっと続くのです。

　2部の礼拝も同じ脈略ですが、時間を無駄にしないようにしましょう。すでにこの地上のもの、肉のものによって左右されない天からの祝福をいただいている者なのです。先ほども申し上げましたように、どんな被造物も、どんな状況も環境も攻撃も死でさえこの祝福を奪うことができないのです。そのような祝福をいただいている者です。患難なのか困難なのか飢えなのか裸なのか、攻撃なのか敵なのか、圧倒的な勝利者になる。どのような問題の前でも十分に勝利できる祝福を私たちはすでにいただいています。そして、すべてが実は答えであり、すべてが機会となる、そのような不思議な祝福の中に導き入れられている者なのです。ローマ8：28、すべてを働かせて益としてくださいます。私たちは悲しいことだと思っていたのに、私たちは失敗だと思っていたのに、それが一気に変わる祝福なので、肉の欲求などはいらない者なのです。十分です。私たちの弱さのゆえに皆さんが失敗したからといって、神様が皆さんを見捨てることなどは一切ございません。何も心配しないようにしましょう。弱気にならないように。合理化してはいけないでしょうけれども、キリストに向かわないといけません。誰かのせいではありません。肉的な条件が悪いからではありません。クリスチャンなのに肉に振り回されるところから自由にならないと、人のせいや物のせいや環境、状況のせいにして、そこに不満やつぶやきが終わらないでしょう。そうなると、それが小さいか大きいかに関係なく、汚い野望に発展するようになります。それが人生の軸になり、それを満たすために祈り、それを満たすために教会に通うというような残念なクリスチャンになってしまいます。サタンに勝てません。まことの余裕をもってください。どうでもいいよと。キリストのゆえに私はもうすでに祝福されている者なのだ。今死んでも構わない。そのまことの余裕があるときに、サタンが踏みにじられるようになるわけです。サタンよ、去れと命じるときもあるし、サタンはもうすでにイエス・キリストによって踏み砕かれて、圧倒されているものなのです。私たちの不信仰がサタンを活発に動かせるわけです。

　問題はこのように状況、環境と関係なく、キリストにあってすでに幸せな者、満足をいただいている者、平和な者、安らぎな者なのに、これが刻印されていないことです。ポイントはこれが自分の中に刻印されて根を下ろして体質になるようにすることです。それをお祈りと言います。祈りの中で、感情がついて行かなくても、このすでに与えられている天からの祝福、十分な祝福を繰り返し、繰り返し、繰り返し告白して、刻印していくこと以外に方法はありません。そのためにあまりにも情緒的に不安定な場合は長い呼吸をしたり、腹式呼吸などを活用しながらします。脳が安定しないから。でもポイントは、この祝福の内容が刻印されることなのです。それ以外のものが、つまりサタンの汚物がいっぱい刻印されているから、それが取り出されるためにはいのちの光のみことばが入り込まないといけません。すでに恵みによって、イエス・キリストによって、そのようになっているということを信じてください。1回、2回で結果が出なくても失望せずに、繰り返しやり続けていただきたいと思います。このように肉の欲望がいらないほど、天にある霊的祝福、キリストにある完璧な祝福、それが十分だということで豊かになれば、信者は肉の欲などから自由になり、神の願い、神の望みに従って聖なる欲望に生きるようになります。この聖なる欲望という言葉がふさわしいかどうかは分かりませんけれども、肉の欲によってそれを目標にして人生を生きるのではなくて、聖なる欲によって生きる存在になります。

　その聖なる欲とは何でしょうか。神の願いは一体何でしょうか。世の中の誰もできないNobodyの人生、それがいのちの運動なのです。自分の人生の目標、自分の人生の心からの欲求というものがどこにフォーカスを合わせているのかをチェックしないといけません。誰もできない、政治家もお医者さんも教授も心理学者も科学者もできないこと、市長さんも知事もできないNobodyのこと、いのちの運動、キリストの運動、これが自分の欲なのです。欲という言葉があまりニュアンスが良くないのですが、自分の願いなのでしょうけれども、目標もそれなのです。いのちの運動というのはNobodyです。自負をもって決断しましょう。マルコ16：17-18、イエスの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、毒を飲んでも害を受けることがない、病人に手を置けば病人はいやされる。そのことが目標です。どのようにしてそれができるのでしょうか。聖霊が臨まれると力を得て、エルサレムから地の果てにまでイエスの証人となることによって、そのようなことが起きると言われました。これにフォーカスを合わせて、これが私たちの願いであり、これが私たちの願望であり、これが私たちのやりたいことです。この聖なる願望を持っているパウロは、刑務所の中でこのように言っています。ピリピ3：12-14「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです」。肉的にどうのこうののために生きるのではなくて、それを目標にして人生を費やす愚かなことから自由になって、イエス・キリストの目標に向かって、この世に絶対必要なことのためにNobodyのいのちの運動のために、そのような聖なる願望によって人生を生きる人は最後にこのように人生を終えるようになります。

　Ⅱテモテ4：7、パウロの告白です。「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」。それから主の前に召されます。しかし、肉の欲を基準にして人生を走る人は最後にむなしいため息とともに人生が終わるわけです。なぜでしょうか。クリスチャンなのに。イエス・キリストの血潮によってイエスのいのちが与えられ天にある霊的すべての祝福をすでにいただいている幸いな者なのに、なぜそのような無駄な人生、むなしい人生を送るのでしょうか。その理由がどこにあるのでしょうか。自分の肉の欲を抑えるために何をしようかということを思わないように。キリストにあって自分を見つめ直すようにしましょう。私はもうすでに肉の欲などはいらないほど、天からのすべての祝福、十分な祝福をいただいている者です。それを味わって、そこで答えを出さない限りは正しい答えは得られません。それが本物なのです。こうしたから悪い、ああしたから悪い、良いというような簡単なことではありません。ぜひ祈りの時間を設けるようにしましょう。皆さんの願いもいっぱいあるでしょうけれども、その願いが聖なる願いなのでしょうか。あるいは肉の欲求なのでしょうか。願いを祈る以前に、キリストにあって肉の欲求が、ある意味、祈りの課題が消えてなくなるほど、いらないと思うほど、キリストにあるすでに与えられている祝福に集中して、それを繰り返し、繰り返し、確認して、確認して、確認して、自分の脳細胞に刻印していくその祈りを始めてください。その祈りのときをぜひ持ってください。それができないようにあらゆることでまた悪魔が邪魔するわけです。環境のせいでも人のせいでもありません。もっと極端に申し上げると、サタンのせいでもありません。自分なのです。神を離れて以来、自己中心の自分なのです。自分に向き合って、キリストにある自分を見つけ出して、自分が思っていた自分から自由になるようにしましょう。その自分というものは理屈がどうであれ、周りから見たときに称賛されることなのか、非難を受けるようなことなのか関係なく、全部肉なのです。そこを捨てて、それによって評価しているすべての評価を否定しながら、ひたすら一心にキリストに集中して、キリストの中にある自分、神が永遠に愛を注いでいらっしゃる自分、キリストが血を流して買い取られた自分、キリストともに生かし、ともによみがえらせ、ともに天の所に座らせてくださったその自分と向き合う静かなときをぜひ持っていただきたいと願います。文句を言わずに、つぶやかずに。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。赦され和解をいただいて回復の祝福を味わったのにもかかわらず、アブシャロムのように肉に捕らえられて結局滅びていく姿を見ながら、私たちはそういうことがいらないキリストにあるいのちをいただいている、天からの完璧な十分な祝福の主人公、幸いな者であることをさらに、さらに思い出して、さらに、さらに集中することができるように。それでサタンが踏みにじられることによって、神の国を見ることができるように、ひとりひとりを憐れんでください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。